
学園戦争

周防 秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園戦争

【Nコード】

N7573I

【作者名】

周防 秋人

【あらすじ】

これは、学内抗争を止めるお話。

第6次中東戦争で軍医として参加した周防琢磨は日本に戻ってくる。ゆつくりとした生活が待っていると思った周防だが、本郷理事長の強制的な推薦で月詠武術学園に中途編入する羽目に。周防は学園内で起きる抗争に強制的に巻き込まれていく。

t h e w o r s t d a y i n o n e ' s l i f e 生涯最悪の日(前)

えっと初の投稿です。

稚拙で不甲斐ない文章ですがよろしくお願いします。

拝啓

日差しも強くなり始めているこの頃ですがいかががお過ごしでしょうか……。ってちゃんとした手紙の書き方なんて母さんは俺に教えてないよね。

まあ、学校で習った気がするけど親子なんだから堅苦しいのは抜きにするね。

六月十日にいよいよ月詠武術学院に編入することになりました。

十日からは寮生活になるから来週からの仕送りは寮のアパート宛に送ってね。

間違つてに学院宛て送っちゃダメだからね。

この前からスポーツを始めたって聞いたけど、母さんはもう若いんだからかくれぐれも無理はしないようにね。

あと、連絡しないでこっちに来ないでね。いろいろと手続きが必要だから門前払いされる羽目になるよ。

じゃあ、なにかあつたら手紙か電話するね。

身体には気をつけてください。

琢磨より

「よし、これでいいかな。」

周防 琢磨は満足そうな感じでつぶやいた。

時計を見ると九時を指していた。

「そろそろ学院に行かないとな」

琢磨は前の学校の制服を手にとりホテルの部屋をでていった。

琢磨は学院に行く途中にコンビ二の前にあつた郵便ポストに両親宛ての手紙をポストに投函した。

「暑いな」

今年の春は異常なくらいに暑かつた。

まだ5月だというのに気温は二十五度を超える日が何日もあつた。これも地球温暖化による影響なのか。と呟きたいほどの暑さだつた。

琢磨が行こうとしている月詠武術学園は日本で一番広い高校である。そこはここ二十年足らずの専門校であるが、現在では学院の名の通り日本で多くのオリンピック級の選手や格闘技でプロになった選手が多数いる。

意外なことに自衛隊や傭兵部隊などにも卒業生がたくさん輩出している。

もちろん武術や格闘技だけじゃなく、医者や看護師、軍医なども多い。

全国で難関とも呼ばれる程の高校となつた。いわゆるブランド校なのだ。

女子生徒の制服も可愛く、男子だけでなく女の子にも人気校でもある。

琢磨がいたホテルから学院まではだいたい十五分程で着いた。

学院は都内の中心って言っても過言じゃない場所にある。

周りには高層ビルや高層マンションなどが立ち並んでおり学院からは東京タワーがハッキリと見ることができる。

琢磨は学院に入るのは二度目だったのですんなりとはいれた。

最初に入った時は侵入者扱いをされて警察まで連行されそうになったものだ。

その時にちょうど理事長と出会って解放されたのは言うまでもない。

月詠武術学院は5階建てになっており、様々な医療器具の揃っている医療棟、一般授業をおこなう学院棟、学院生全員が住む寮棟の3つに別れている。

そのほかに格技場が2つに体育館が2つ、そのほかに弓道場や剣道場、屋内練習場、射撃場などが完備されているなど街の中心部とは思えないほどの広大さである。

初めて見た時は違う国に入り込んだのではないかと感じてしまうほどの異質な空間だった。

慣れない琢磨は先生に先導されながら理事長室へと入っていく。

コンコン

乾いた木製のものを小突く音。

「入りなさい。」

すぐさま返事が返ってきた。

琢磨は扉の前で深呼吸をし、ドアノブを回した。

「失礼します。」

琢磨は部屋に入ると深々と挨拶をする。

「まあ、座りなさい」

理事長と思われる人うながすと話をきりだした。

「いよいよ明日から本校へ編入となるが緊張してるかね？」

「いいえ。こういうコトにはなれてますから。それに向こうよりは安全ですからね。」

琢磨は笑顔で答えた。

その様子を理事長はみると笑いだした。

「やはり君は素晴らしい逸材だよ。こっちもこっちで危険なのだが

な。」

理事長は琢磨を褒め称えた。

それから五分程だが寮についての話を聞くと横に立っていた秘書の方が時計をみた。

「理事長。お時間がありませんのでそろそろ…。」

「そうか…。もうそんな時間か。」

理事長は名残惜しそうにつぶやいた。

「じゃあ僕も挨拶だけだったので失礼します。」

琢磨は手本のようなお辞儀をみせた。

それをみた理事長は顔を上げた琢磨の目を見ていった。

「明日から我が校の生徒だ。よろしくたのんだぞ。」

「はい。」

琢磨は丁寧な動作でお辞儀をした。

午後十時四十八分…。

時間が変わり学園の校舎は月明かりによって照らされていた。

そこに二つの人影がある。一人は小太刀を握って座っていて、もう一つの影はナイフを器用に指先で回しながら壁に寄りかかっていた。

「嵯峨はもう知ってるかな。明日は転校生が来るらしいよ。」

ナイフをもて遊んでいる伊勢が小太刀を鞘にしまう嵯峨に話し掛けた。

「ああ、大槻の情報網でも性別さえも分からないらしいな。」

「へえ、そうなんだあ。あの電脳王の大槻がねえ。」

意外そうにつぶやくと伊勢の手が止まった。

「どうした。」

嵯峨はいつもおしゃべりな伊勢が黙り込んだことに気味悪く思った。

短い沈黙…。

伊勢は真剣な眼差しで嵯峨に言った。

「なあ…。転校生が男か女か明日の昼飯賭けてみないか。」

伊勢の拍子抜けな提案に嵯峨は落胆した。

「なにを言い出すのかと思えばそんなことか。」

「なに言ってるの！一食分はデカいぞ。学生は辛いんだからな。」

「そんなコトで真剣になれるなんて…。馬鹿かお前は。」

嵯峨は深くため息をついた。

「別にいいじゃん。それで嵯峨はどっちにする。」

嵯峨は少し投げやりな感じで答えた。

「女じゃないのか」

伊勢は少し考えてた様子で言った。

「うーん、じゃあ俺は男でいつかなあ。」

伊勢は再びナイフを回し始めた。

「これで賭けは成立だねえ。」

伊勢は満点の笑みで話をまとめてしまった。

嵯峨はその笑顔をみて後悔した。そしてばつが悪そうに頭をかいた。

「竜司。実はドツチだか知ってるだろ。」

伊勢は小悪魔的な笑顔で答える。

「実は三限目サボって体育館の屋上にいたら理事長室で話してるのをたまたま見ちゃったんだ。」

「お前またサボったのか。この調子じゃあ今年も単位が厳しいぞ。」

嵯峨は伊勢の自由奔放さに少し呆れながら言った。

「そんな時はなんとかなるよ。」

伊勢は相変わらず軽い感じで微笑む。

嵯峨は伊勢の顔を見ると説教をする気力がなくなってしまった。

そして、話題を無理矢理に戻し始めた。

「で、転校生の性別は男なんだな。」

「うーん、そうなるかなあ。でも…。」

伊勢は少し曖昧な感じで答えた。

「でも、なんなんだ。」

嵯峨はもつたいぶる伊勢を急かすように聞いた。

伊勢がピタリとナイフで遊んでいた手をとめた。

「でも、この時期に転校してくる生徒にしてはあまりにも弱すぎるんだよなあ。」

「そうか…。お前がいうなら間違いないな。」

嵯峨は伊勢の言うことを聞き入れたが納得はいかなかった。

伊勢の人を見抜く力は尋常じゃないほどずば抜けている。

実際に一年近く一緒に過ごした嵯峨はそれを実感している。しかし、この学院に中途入学するには相当の実力者でないと無理だ。もしかして伊勢が相手の力量を見間違えたのか。だがそれでは一体…。嵯峨の思考がフル回転する。

しかし、結論を出すにはあまりにも情報が少なすぎた。

「なあ、他に情報は無いのか。」

「うーん。ないなあ。」

伊勢もまさにお手上げ状態という感じで両手を挙げた。

「そうか。」

嵯峨はそれだけ言うと黙り込んでしまった。

いつもの嵯峨の悪い癖だ。なにかが矛盾しているとそれが解決するまで考えてしまう。結論は決してでてこないと分かっている。伊勢は嵯峨を見てそう思った。

「ここで考えても結論はでないよ。それに明日になれば分かる」とだしね。」

その言葉に嵯峨は自分の思考回路を閉じた。

「そうだな。明日になれば転校生がどんな奴なのか分かるか…。」

「そうそう。その運命は神だけが知っている。だから明日になるのを待たなきゃ。」

伊勢がそう言つと嵯峨は立ち上がり伊勢とともに薄暗い学院内へと消えて行った…。

。

t h e w o r s t d a y i n o n e ' s l i f e 生涯最悪の日(後)

週一ペースで更新したいと思います。

その？

「さてと。多分これだけかな」

琢磨はそう言うつと宿泊先のホテルから出る為の荷造りを終えた。実際に荷造りといっても昨日のうちに学院の寮へ荷物を置いてきたから少し大きめのカバン一つで収まってしまった。

琢磨はホテルに備え付けてある時計で時間を確認した。

「そろそろ八時になるか…。もう行かないとダメだな。」

琢磨は椅子に掛けてあつた制服を着ると荷物が入ったカバンを肩に掛けてチェックアウトするために部屋を出た。

ホテルを出て15分。琢磨は学院の校門をくぐり、職員室前に来ていた。

「今日から僕も月詠生か…。でも、この制服はかなり浮いてるかな。」

琢磨は独り不安そうつぶやいた。

それもそのはず琢磨が不安がるのも無理がない。何故なら、琢磨の制服は紺色を基調とした学ランの制服を着ている。しかし、月詠の生徒が着ている制服は白を基調とするブレザーだからだ。

おかげで琢磨は登校中に多くの月詠の生徒に注目を浴びてしまった。結局、その視線に耐えきれなくなつて職員室まで走る事になつてしまったのだ。

コンコン…。

「失礼します。今日からこの学院に転校した。周防琢磨です。よろしく願います。」

琢磨はノックをして職員室に入ると同時に挨拶をした。

琢磨の一番近くにいた男が待ったいたかのように話し掛けて来た。「君が周防君だね。私は君のクラスの担任になる石見忍です。よろしく頼みます。」

石見の顔には頬に大きな刀傷が一本入っていた。しかし、見た目は優しい雰囲気をかもし出している。

琢磨が少し石見の顔をみていた。

そんな琢磨の視線を石見は感じとったのか笑顔で返した。

「私の顔の傷はあまり気にしないで下さい。若気の至りというものですから。」

琢磨は石見の一言で我にかえった。

「すいません、石見教官。」

琢磨はそう言うつと頭を下げた。

「いいんですよ。みんな気にしちやいますしね。さあ、周防君、時間がありませんのでそろそろ理事長室に挨拶をしに行きましょう。」

石見はそう言うつと琢磨を誘導するように歩き出した。

背中を見せてはいるが全く隙の無い歩き方である。

そう思いながら歩いてると石見教官が琢磨に背を向けながら話し掛けた。

「君は洞察力が優れていますね。でも、あまり日常的に観察しない方が身のためですよ。誰にだって知られたくないモノがあるんですから。」

「ご忠告ありがとうございます。」

たしかに無意識ではあるが観察をしている。向こうにいたときの癖が抜けてないことを気をつけなければいけないと思いつつも石見に尋ねてみることにした。

「あの、ひとつだけ聞いてもよろしいでしょうか？」

「いいですよ。どうしました？」

「教官は戦争を体験してますよね。しかも、兵士として。」

石見のかもしれない穏やかな雰囲気が一瞬だけ消えた。だが、それは本当に一瞬のことだった。

「おや、やはり君は鋭いですね。君の推測どおり過去に一度だけ経験してますよ。」

「お答えいただきありがとうございます。もうこれ以上はなにも聞きません。」

「そうですね。なにか困ったことがあれば聞いてください。っと、もう着いちゃいましたね。」

石見はそういつと理事長室のドアをノックした
コンコンッ。

「理事長、石見です。新入生を連れて来ました。」

石見教官のドアを叩く濁いたノック音が琢磨の身を引き締める。

「入りたまえ。」

低く渋い声がドアの向こう側から響いた。

「失礼します。今日から月詠武術学院に転入しました。周防琢磨です。」

昨日と同じように琢磨は礼儀よく挨拶した。

「相変わらず礼儀がしっかりしておるな。」

本郷は数回ほどしか会っていない琢磨を随分と気に入ったようだった。

「そうですね。普通のことだと思いますが?」

琢磨は本郷のほめ言葉に対して謙遜するような口調でいう。

「そうやって己が普通だと感じているのは自信があるものだけじゃよ。琢磨よ。お前は中東の方では大活躍だったそうじゃないか。」

「いえいえ、自分はまだまだ未熟者ですよ。」

本郷は世間話をするのを惜しみつつ話を切り替えた。

「まあよい。時間が無いのでな。そろそろ本題とするかの。」

本郷はいかにも理事長らしい雰囲気醸し出し、話し始めた。

「我が校は創立して二〇年という短きものだが数々の実績を残し

ておる。創立者の名前は本郷 一徹つまりは儂の事である。この学院を創立したきっかけは君の知るとおり、衰退しつつある武術の復興と強い精神力をもつ日本人の育成である。主な校則は五つのみ。

その一 死人をだすな。

その二 日々の鍛錬を怠るな。

その三 試合は真剣勝負。

その四 友との協力

その五 常に最善の行動を心がけよ

君はそれを承知の上でここへ来た。儂は他の理事の反対をおしきつて君を推薦した。当然の如く期待しているんだがのう？」

琢磨の横に立っていた石見教官が少したじろいだようにみえた。いや、見えたのではない。

本郷のたずねる目は獲物を狙う目であった。しかも、ここで「期待するな」と答えれば確実に殺されるほどの殺気を放っていた。

石見は次の言葉で彼の運命が決まってしまうと思った。だが、琢磨は本郷の殺気を無かったかのように微笑んだ。

「戦闘は期待しないでください。医療であれば誰ひとりとして死なせはしません。そのような覚悟が無ければここに座っていませんよ。」

この言葉だけで重苦しかった理事長室の空気があっという間に変わってしまった。

これに本郷は満足した表情をしていた。

「うむ、合格だ。我が殺気をこும்受け流すとは、ワシの愚弟の息子にしては骨がある。」

本郷と琢磨の意外な関係を知ってしまった石見教官は呆気にとられるしかなかった。

「理事長の弟さんの息子さんだったんですか…。」

その？

朝の教室 AM8時ごろ

伊勢は教室の一番後ろの窓側の席へ向かっていった。

まだクラスの半数も教室には集まっていない。まあ、それもそのはずである。何故なら、授業は8時40分から始まるので20分前に入れば十分に事足りるからだ。

伊勢は授業を殆ど聞いていない。しかし、成績は真ん中よりも上の方である。嵯峨が言うにはバカではないらしい。

「さてと、今日はどこでサボろっかな。」

そうつぶやいて何気なく窓の外をみると白い清潔感ある制服の集団の中に一つだけ浮いている紺色の制服が伊勢の目に映った。

「ん、あれは昨日みた転校生じゃん。さっそく嵯峨に報告しなきゃ。」

伊勢は隣の教室へと向かっていった。

「嵯峨あー。いるか？」

伊勢は馬鹿デカイ声を出して、教室を見回した。

見た感じでは嵯峨が居なかったので長髪の女の子に親しげに話しかけた。

「ねえ、凜ちゃん。睦月はまだきてないのかな」

凜ちゃんと呼ばれた女は長い髪を鬱陶しくかき上げながらいった。

「今日はまだ見てない。というか、次にその名で呼んだら殺すぞ。」
女の子らしかぬドスの効いた声だった。

「無理無理。ただが叙位12位の凜ちゃんなんかに叙位5位のオレ

が負けるわけがないし、それに殺しは校則違反だよ。『女帝』の凜ちゃん。」

この学園は叙位という制度が設けられている。

これは、学園の中で明確に生徒の権力をあらわしているものである。叙位は放課後に、部活とは関係なしに生徒同士がリアルファイトを行い順位を決めている。

その中でも叙位20位以内の優秀な生徒に通り名がつけられるシステムになっている。

海原凜は、女性の中でトップの位置にいる為『女帝』という名が本郷理事長から授けられている。

無論、通り名を付けるのは本郷理事長の趣味である。

「どうかしらね。あんたなんか叙位5位なわけない。なんかコネでも使ったんじゃないの。貴様の通り名『闘神』が泣いているぞ。」
海原は伊勢を皮肉った。

海原と伊勢の痴話喧嘩が始まるうとしたときに後ろから声が聞こえた。

「二人とも朝から五月蠅いぞ。」

伊勢と海原は声がする方に顔を向けるとそこに嵯峨が不機嫌そうに立っていた。

「コイツが悪い。」

海原と伊勢はまるで双子のような息ピッタリのハモリをみせた。

しかし、二人はそのハモリが気に入らなかったのか、互いに睨みつけ始めた。

「ところで竜司はなんで隣のクラスにいるんだ？」

嵯峨は二人の間を邪魔するように割ってはいっていき自分の席に荷物を置いた。

伊勢は用件を思い出したのか海原とのにらめっこを止めた。

「そうだった。凜ちゃんがるさかったから危うく忘れるところだった。やっぱり昨日言った転校生はやっぱり男だったよ。」

「そうか、話はそれだけか？」

嵯峨は次に出る言葉に予測がついていたが、一応伊勢に聞いてみた。

「まさか昨日の賭けのことは覚えてるよね。」

伊勢はニヤニヤしながら嵯峨をみている。

「さあな。なんの話しだかまったくだ。」

「そりゃあないよ。昼飯にタダでありつけると思ったのに。」

嵯峨がとぼけるように言うとすぐに伊勢はオーバーなりアクションをとった。

「伊勢に嵯峨、賭け事は校則で禁止されているのを知っててやっているのか。伊勢はともかく嵯峨までなにをしているんだ…。」

海原は呆れたのかため息をつきながらつぶやいた。

「うるさいなあ。これは男同士のお話だから、凜ちゃんには全く関係ないよ〜だ。」

伊勢は嵯峨との会話を邪魔されたのが気に食わなかったのか海原のお小言が嫌だったのかはさだかではないが海原には無関係であることを主張していた。

「海原にまったく関係ないことは無いだろう。ライバルになる可能性があるんだからな。」

「しかし、いまの時期に転校生というのは気になるな。」

海原はを独り言のようにつぶやいた。

「それに転校生の情報が入ってないのも気になる。」

嵯峨はカバンから教科書を取り出し、机の中に入れてゆく。

「私は今知ったぞ。ここに転校出来るのなら余程の強いものなんだろうな。」

海原が少しばかり危機感を持っていることは口調でわかった。

「二人は見えないからわかんないけど、オレがみた感じでは百位ぐらいが限界だね。」

「そんなに頼りないのか？」

海原は眉間にシワを寄せながら伊勢に疑問を投げかけた。

伊勢は呆れながら手を振って「ありえないよ。」と言った。

「だが、情報が少な過ぎる。伊勢はどんな根拠があつてそんな事がいえるんだ？」

嵯峨は、いつもは「そうか」と言つて片付けてしまう海原があまりにも伊勢に食い下がるのを見て不思議に思った。

「海原、どうしてお前は転校生が弱いかことに疑問を持っているんだ。ただのスポーツ特待生かもしれないだろ。」

「なら、ただのスポーツ特待生が五月の時期に転校してくるのか。」

それにこの学園は二年前からスポーツ特待生の引き抜きはしていないし、今回が引抜だとしても生徒にこんなにも情報が入らないのは明らかに不自然だろう。」

海原は一気に捲くし立てるように自分の疑問をぶちまけた。

それを聞いた嵯峨は、海原も自分と同じ様な考えを持ったことを知つて笑つてしまった。

もちろん、海原や伊勢にはわからない程度にだ。

所詮、他の人間と同じレベルの思考力しかないという平凡な自分に笑っていた。しかし、笑い声が聞こえたのか笑つた顔を見られたのかは定かではないが、海原はあきらかに顔を不機嫌に歪ませ、嵯峨に言った。

「何がおかしい。何故、嵯峨はわらっていられる。」

「いや、海原の言っていることは正しい。おかしかったのは伊勢から聞かされたときの俺の意見とあまりにも似ていたのな。」

「言い訳などいい。」

海原は依然として不機嫌な海原は怒って教室を出て行ってしまった。

「あーあ、凜ちゃんが怒っちゃった。放課後が怖いぞお。」

伊勢は少し楽しそうな顔で言う。

「分かってる。」

嵯峨は覚悟というよりも諦めた感じで呟いた。

「あつ、あと昼飯の件は忘れないでねえ。」

「ああ、忘れてた。」

嵯峨は深いため息をついた。

その？（後書き）

やっぱり二週間に一回のペースのおとしです。
すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7573i/>

学園戦争

2010年10月10日02時15分発行